



TITLE:

擬態語・擬音語表現をめぐる一考察：日常に見られる擬態語・擬音語表現と宮沢賢治の作品にみられる擬態語・擬音語表現を取り上げて

AUTHOR(S):

和田, 竜太

CITATION:

和田, 竜太. 擬態語・擬音語表現をめぐる一考察：日常に見られる擬態語・擬音語表現と宮沢賢治の作品にみられる擬態語・擬音語表現を取り上げて. 京都大学カウンセリングセンター紀要 2013, 42: 33-40

ISSUE DATE:

2013-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/185345>

RIGHT:

擬態語・擬音語表現をめぐる一考察

— 日常にみられる擬態語・擬音語表現と

宮沢賢治の作品にみられる擬態語・擬音語表現を取り上げて—

和田 竜 太*

1. はじめに

日々、学生相談の場で主に大学生や大学院生からの相談に携わっていると、その中で、来談者がなかなか言葉にできなかったり、あるいは言葉にできたとしても、それが一般的な意味をもった言葉というよりもむしろ、その人独自の意味づけがされた言葉として表現されているように感じることがある。言葉というのはもちろんその意味が共有されているからこそコミュニケーションの道具として成立するのではあるが、一方で、学生相談も含めた臨床の場では特に、共有されている言葉の意味だけではどこか制約として感じられたり、あるいは自分の体験や感じていることが表現しきれなさが残ることが少なからずあるように思われる。本稿では、そうした個々人における言葉のニュアンスや、その言葉にまつわる意味やイメージの広がりを取り上げて考えてみたい。

2. 言葉とニュアンス

通常、私たちが言葉を用いる時、その言葉を書いたり発する人と、それを読んだり聞いたりする人が、その言葉の意味を共有していることを前提としているだろう。しかしながら、そうした一つ一つの言葉について、個々人におけるニュアンスやとらえ方を改めてよく見てみると、案外全く同じという訳ではなく、時に微妙に、時に案外大きな違いがあるように思われる。その一例として、筆者がある大学で担当した、学部生を対象としたカウンセリングに関する実習でのエピソードを取り上げてみたい。その実習の中で筆者は受講生に、いくつかの形容詞（例えば、「悲しい」、「楽しい」、「たくましい」 etc）を提示して、「この語に近い意味の語を思い浮かべて、できるだけたくさん書いてください」という課題を行ってもらった（この課題そのものは長尾（2008）をもとにしたものである）。すると、各人の語彙力や教示の「近い意味」をどのようにとらえるかによっても回答される語やその数に違いが出てくるのであるが、ここでなにより興味深かったのは、同じ教示を受けた上で、同じ形容詞から思い浮かぶ語が、個々人によって少しずつ、人によっては大きく違うということであった。各人に回答してもらった後、書かれた語についてグループに分かれて共有し話し合ってみると、同じ「悲しい」や「楽しい」という言葉でも、そこから思

* 京都大学カウンセリングセンター

い浮かぶ、あるいはその言葉に付与しているイメージや、その言葉を通して感じる感覚が個々人によって案外違っていることが話し合いを通して扱われることが多くみられたのである。授業後の受講生からの感想の中でも、普段は当たり前のようにその意味が共有されていると思っていた言葉のとらえ方やイメージに実は違いがあることに気がついたり、そのことに驚かされた、という感想が多くあった。この課題で提示した言葉は、「楽しい」とか「悲しい」のように、普段でもよく使われるようなごくありふれた形容詞であり、何ら特殊な言葉ではない。そうした馴染みのある言葉でも、その言葉のニュアンスやそれに付随した意味やイメージの広がりには実は個々人独自のものがあることが示唆されたのであった。私達は普段言葉を用いる時、基本的には言葉の意味を「共有する」ことや、何らかの意図や気持ちなどを「伝える・通じ合う」ことに重心を置いているものと思われる。それを通して、その当事者の間で言葉が言葉としてうまく機能している時には何ら問題はないのかもしれない。しかし一方で、言葉の意味が共有されていることを前提とすることによって、場合によって、知らず知らずのうちに、個々人にとっての言葉の「ニュアンス」が疎外された状態になっている、あるいはさらに進んでそのことによって何らかの祖語が生じている、ということが、もしかしたら私達の周りには潜んでいるのかもしれない。このあたりは、「普段よく使われるごくありふれた」言葉であることによって、「その意味も当然共有されているだろう」という暗黙の了解につながりやすいのかもしれないし、馴染みがあるだけに一つ一つ、その言葉についての個々人の意味のとらえ方やニュアンス、イメージの広がりについて確かめたり、想像したりということを通常なかなか行わないことが多い、ということがあるのかもしれない。

前述の一例で提示したのは、「楽しい」や「悲しい」といった形容詞であったが、私達が普段（人によって使用頻度の違いはあろうが）使う言葉の中に、その言葉自体にニュアンスやイメージの広がりにより幅がある言葉として、擬態語あるいは擬音語が挙げられるように思われる。擬態語とは、「視覚・触覚など聴覚以外の感覚印象をことばで表現した語」（新村編『広辞苑（第5版）』）のことであり、例えば「にやにや」や「きらきら」、「ドキドキ」のように、（人間を含めた）生物や事物のありさまや現象、動き、状態などを描写的に表現した語であり、身体感覚と密接に結びついていると同時に、そこから派生して感情や心情を伴う感覚や様態を表す語も多く存在しているという特徴がある。擬音語とは、「実際の音をまねて言葉とした語」（新村編『広辞苑（第5版）』）のことであり、例えば「がたんごとん（電車）」や「ザーザー（雨）」のように無生物の出す音や、「ワンワン（犬）」や「コケコッコ（鶏）」のように生物の声や鳴き声が含まれる。（なお、「人・動物の声をまねた語」（新村編『広辞苑（第5版）』）を擬声語として分類されることもあるが、本稿では擬声語も擬音語に含めて考えることとする。）これら擬態語・擬音語は、その言葉の意味そのもの、というよりも、その音から感じる感覚や印象によって、感覚的な表現が可能となる言葉である。そうした擬態語・擬音語は様々な形で日常の中でもみられる。そのことについて、次に取り上げてみたい。

3. 日常にみられる擬態語・擬音語表現

上で、「擬態語・擬音語は、その言葉の意味そのもの、というよりも、その音から感じる感覚や印象によって、感覚的な表現が可能となる言葉である」と述べたが、実際のところ、私達が普段用いる擬態語・擬音語の多くは、ある程度、語（語の音）とその意味が共有されていると言っていいように思われる。そのことを示す一つとしては、例えば天沼（1973）、山口（2003）、小野（2007）のように擬態語・擬音語に関する辞典が出版されているところにも窺えるだろう。

このことと関連して、最近テレビのニュースを見ていて、こういう擬音語・擬態語の使われ方もあるのか、と思う機会があった。それは、ある民間の気象情報会社（株式会社ウェザーニューズ）が携帯電話・スマートフォン向けサイトで行っている利用者からの報告にもとづいた気象予測（株式会社ウェザーニューズ「10分天気予報」, および同社2008年10月17日付ニュースセンター記事）でのことなのだが、利用者が現在の天気を報告する際、雨の場合にその強さについて、擬音語を用いて「ポツポツ」、「パラパラ」、「サー」、「ザーザー」、「ゴォー」の5段階から選択するようになっているのである（なお、晴れや曇りの際には、「晴れ・影はつきり」、「晴れ・影うっすら」、「曇り・影なし」から選択するようになっている）。ここでの擬音語表現には凡例があり、「ポツポツ」は「1mm未満、傘ナシでもOK」、「パラパラ」は「1～2mm、傘が必要と思う。近くならダッシュ可能」、「サー」は「2～4mm、並の雨」、「ザーザー」は「4～10mm、しっかり雨、長い傘必須、外出うんざり」、「ゴォー」は「10mm以上、土砂降り、傘を差してもぬれる、長靴必須、外出苦痛」という説明が載せられており、利用者はこの凡例にもとづいて選択を行うことになっている。同サイト内の説明によると、「上記の雨量と雨音の関係は、2005年に雨プロジェクトで行った「雨音調査」の結果を元に作成されています」とあり、同社2005年6月10日プレス・リリースによると1万人を対象として雨量と体感による雨の降り方（具体的にどのような擬音語が選択肢としてあったのかは不明であるが）についての調査をもとにこれらの擬音語が選ばれているようである。「雨の降り方」というのは、一般に天気予報で伝えられる「1時間に何mmの雨」では、ある程度の雨の強さについての指標にはなるものの、実際の雨の様子まではなかなか想像しがたいところがあるだろう。それを、個々人の感じ方・感覚を活かして、感覚的な表現である擬音語を用いてとらえることによって、より実感に近い形で伝え共有しようとする、というのは非常に興味深い試みと思われたのであった。

ここでの擬音語の用い方は、雨量と体感による雨の降り方についての調査をもとに語が選択されていることから想像されるように、基本的にそれぞれの擬音語から受ける感覚や印象が多くの人に共有されている、あるいは共有されうることを前提としていると言えるだろう。もしかしたら個々の「ポツポツ」や「パラパラ」でもどの程度の雨の降り方の時にそう感じるかは個々人で微妙に差があるかもしれないし、ここに例えば「シトシト」が入ってくると一体どこに入るのか、というようなそれぞれの語の間隔（感覚）の程度に関する微妙な問題はあるが、しかしなが

ら「ポツポツ」なら弱い雨であり、「パラパラ」、「サー」となるにしたがって強い雨になっていき、「ゴォー」は非常に強い雨というのは、多くに共有されうる感覚であろう。このように擬態語・擬音語による表現は、多くの人達の間である程度その感覚やイメージを共有されることで、一般的な言葉による表現よりもさらに個々人の実感に近づくことが可能となるように思われる。このように、日常でみられる擬態語・擬音語を用いた表現の多くは、たいていの場合、ここでみたような「その感覚やイメージを共有する」方向を向いているように感じられる。

その一方で、擬態語・擬音語は必ずしも、語（語の音）とその意味について、あらかじめ共有されていたり、定義されていたりすることに縛られる訳ではなく、個々人の感じた感覚や感じ、気持ちetcを音の形で表現することを許容する自由度の高い言葉でもある。このことに関して、一般に用いられている、つまりその用法や語（語の音）とその意味が共有されている、あるいはその意味がある程度定義されているような擬態語・擬音語に縛られることなく、独自にそうした言葉を生み出していった作家・詩人を思い浮かべてみた時、誰が思い浮かんでくるだろうか。筆者の中ではまず宮沢賢治が思い浮かんでくる。次に、宮沢賢治の作品にみられる擬態語・擬音語表現を取り上げて、さらに考えてみたい。

4. 宮沢賢治の作品にみられる擬態語・擬音語表現

宮沢賢治の作品には、擬態語・擬音語がよく見受けられる。しかも、一般的にはほとんど用いられない、宮沢賢治が独自に創造したと思われる擬態語・擬音語やその用法が非常に多い。たとえば、その一例として、次の作品もそうした宮沢賢治独自の擬態語・擬音語から始まるものである。

どっどど どどうど どどうど どどう、
青いくるみも吹きとばせ
すっぱいくわりんもふきとばせ
どっどど どどうど どどうど どどう （『風の又三郎』）

「どっどど どどうど どどうど どどう」という表現から、どこか遠くの方から、地鳴りとともに、体ごと足元から吹きとばされるような、重みのある強い風が吹きつけてくる、（五感の感覚すべてがない交ぜになり感覚の区別すらつかなくなるような）そんな体感がこの語の音から感じられはしないだろうか。これは、単に風についての説明をいろいろと加えるのと違い、語の音によってより感覚的に、そして直接的に訴えかけることを可能にしているように思われる。

また、次の作品でも、擬態語・擬音語が多用されており、例えば以下のような語がみられる。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どこどこするからだを、つめたい草に投げまし

た。 (『銀河鉄道の夜』)

そしてジョバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍のやうに、ぺかぺか消えたりともったりしてゐるのを見ました。 (『銀河鉄道の夜』)

それから^{ほうきぼし} 星がギーギーフーギーギーフーて云って来たねえ。 (『銀河鉄道の夜』)

こうした宮沢賢治の作品における擬態語・擬音語の多様さについては、様々な形で取り上げられており、例えば吉本 (1996) においては1章を割いて「擬音論・造語論」として述べられており、また田守 (2010) は、その特徴について「音象徴的視点」から分類・分析を行っている。では、そもそも宮沢賢治はいったいなぜ、このように多くの擬態語・擬音語表現を用い、しかも多くの独自の擬態語・擬音語表現を作り出したのであろうか。このことに関連して、吉本 (1996) は「宮沢賢治は擬音が習俗にちかづくことをまっこうから避けようとした。(中略)かれには擬音が事象そのものの実体の像にできるかぎり近づくことのほかに、基準はなかった」と述べている。宮沢賢治には、どこか直にその本質を感じ取ったり、あるいは“見える”ところがあったのではないかと思われるが、それとともにそうした感覚やイメージ、ヴィジョンを言葉にする卓越した表現力も持ち合わせてもいた。しかし一方で、そうした表現を易々とできたのかというと必ずしもそうではなく、何か (表現ということであろうと言葉) に縛られる、あるいは制約を受けつつも、しかしその中でいかに自分自身が感じ取っていたり、“見えて”いたりする“何か”に近づけていくか、その“狭間”での格闘も同時にあったのではないだろうか。そうしたことが、一つには一般には用いられないような形での、独自の擬態語・擬音語表現の形として表れているようにも思われるのである。

このことに関わるように思われることとして、宮沢賢治の作品には、『銀河鉄道の夜』をはじめとして、何パターンもの異稿が残されている作品が多い。たとえば、前述した『風の又三郎』にも『風野又三郎』として初期型が存在している。『風野又三郎』の書き出しは、『風の又三郎』のそれとは異なっている。

どっどどどどうど どどうど どどう、

ああまいざくろも吹きとばせ

すっばいざくろもふきとばせ

どっどどどどうど どどうど どどう (『風野又三郎』)

「どっどどどどうど どどうど どどう」の部分のみをみると、一つ切れ目がないことによって、筆者には、遠くから音を上げながら迫って来、そして強く吹きつける風の生々しさや激

しさ、厳しさがより一層感じられるように思われるが、いかがであろうか。このように作品を繰り返し何度も練り直し、突き詰めて表現をより洗練させていこうとする宮沢賢治の姿勢は、宮沢賢治の生き様そのものと同様、ものごとの「ほんたう」に迫ろうとする、真摯で、自らに厳しい姿が浮かんでくるようである。

前述したように、宮沢賢治の作品における擬態語・擬音語表現には、普段私達が用いない宮沢賢治独自の語が多く見受けられるのであるが、そうした語は、どこか瞬間的な分かりづらさ、とっつきづらさ、表現の珍しさによって、作品を読む人をそこで一旦立ち止まらせるところがあるように思われる。どこか、すぐには飲み込めない、噛みごたえのある食べ物をじっくりとよく噛んで柔らかく噛み砕いてから飲み込む、そういった作業の繰り返しを読み手に促している、そんな感がある。たとえば、次のような場合もそうであろう。

おもてにでてみると、まわりの山は、みんなたったいまできたばかりのように
うるうるもりあがって、まっ青なそらのしたにならんでいました。

（『注文の多い料理店』（どんぐりと山猫））

ここでも、「うるうる」という言葉のところで、そのまま読み進めようとするが続けて「もりあがって」という言葉がやって来て、もう一度「うるうる」を確かめに戻る、そんな読み方になりはしないだろうか。「うるうる」というと、たいていの場合は目に涙が溜まって潤んでいる状態を表すために用いることがほとんどで、山の盛り上がっている様を「うるうる」という形で表現するのは非常に珍しく、宮沢賢治独特のものと言えよう。ここでの「うるうる」には、笈（1993）が「つややかな新鮮さでもって、まわりの山がこんもりと盛り上がっている有様」と述べているように、瑞々しさや、内側から湧き上がるような様が語（語の音）から感じられるように思われる。もちろん、これにもいろいろな想像なり、あるいは場合によってはいろいろな“解釈”はあり得るだろう。宮沢賢治自身もこの「うるうる」という音によって自身の何らかの感覚なりイメージを表現しようとしたことであろう。しかしながら、宮沢賢治の作品を読んで、多くの宮沢賢治独自の擬態語・擬音語表現に接する時、その意味していることは何か、というよりも、読み手をふと立ち止まらせ、想像を促すこと、あるいは様々な想像を可能にすることにその要点があるのではないだろうか。このことは、筆者には、急に全く知らない言語の世界に放り込まれたような、言葉が音としてそのまま直に飛び込んでくるような、そんな世界の中に読む人を誘っているように感じられる。それは時に現実と想像の世界を行き来する子どもの世界そのもののようでもあり、童話という形で子どもに向けての表現を模索した宮沢賢治自身がこの世とあの世を行き来している、そんな姿が想像されるように思われる。

先にも述べたように、言葉は、ある程度その意味が共有されることで、コミュニケーションの道具として成立するものであろう。しかしながら、「話すために言葉を発するのは、あるばあいじ

つにつらいことだ。言葉が発せられた瞬間から、もうほんとに喋言りたかったのは、そんな言葉でいいあらわしたことでなくて、もっとべつの言葉だというおもいがやってくる。それをまた補ったり修正したりして、べつの言葉を話しかける。するとまた、いやそんなことでは言いあらわせないというおもいにかかる。また別の言葉をしゃべりだす。するとまた…」と吉本(1996)が述べているように、そうした作業の過程は、まさに宮沢賢治がその表現を模索した歩みそのもののように感じられ、宮沢賢治が生み出した様々な擬態語・擬音語にはその一端があらわれているように思われる。

5. おわりに

本稿では、擬態語・擬音語を取り上げて、言葉と、その言葉にまつわる個々人にとってのニュアンスや意味づけ、イメージの広がりについて、日常にみられる擬態語・擬音語表現や、宮沢賢治の作品にみられる擬態語・擬音語表現をもとに述べてきた。学生相談の場、さらに広く言えば臨床の場においては、来談者が自身の感覚や気持ち、体験にいかにかアプローチし、いかにそれらにまつわる表現を模索していくかということが、その場のテーマとなることが少なくない。その際、何らかの言葉への意味づけや、その言葉にまつわる感覚やイメージの広がりを想像していく手がかりとして、本稿で述べてきたような擬態語・擬音語表現にふれた時のありようが、そのヒントになりはしないだろうか。

文献・資料

天沼寧編 (1974)『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版

株式会社ウェザーニューズ「10分天気予報」サイト (携帯電話各社用サイト、スマートフォン用サイトなど複数あるが、例えばEzweb版はhttp://ez.wni.co.jp/fcst10m/10ten_index.html)

株式会社ウェザーニューズ プレス・リリース (2005. 6. 10) <http://weathernews.com/ja/nc/press/2005/050610.html>

株式会社ウェザーニューズ ニュースセンター (2008. 10. 17)「全ての天気に対応した『10分天気予報 (全天候版)』を開始」<http://weathernews.com/ja/nc/press/2008/081017.html>

笈寿雄・田守育啓編 (1993)『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房

宮澤賢治 (1973)『校本宮澤賢治全集 第8巻』筑摩書房

宮澤賢治 (1974)『校本宮澤賢治全集 第10巻』筑摩書房

宮澤賢治 (1974)『校本宮澤賢治全集 第11巻』筑摩書房

長尾博 (2008)『やさしく学ぶカウンセリング 26のレッスン』金子書房

小野正弘編 (2007)『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』小学館

新村出編 (1998)『広辞苑 (第5版)』岩波書店

田守育啓 (2010)『賢治のオノマトペの謎を解く』大修館書店

山口仲美 (2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』 講談社

吉本隆明 (1996) 『宮沢賢治』 ちくま学芸文庫